

劫餘詩存

松本芳翠著

書海社編輯部輯

松本芳翠先生著『劫餘詩存』と三浦野方先生著の『劫餘詩存掃帚録』（書海誌 昭和三十六年十二月）昭和三十八年十二月掲載を、詩ごとにまとめました。

『劫餘詩存』はできるだけ旧字を用いて原文通りに、『劫餘詩存掃帚録』は現代仮名遣いに直して掲載しました。

また、書海誌には五十八頁までしか掲載されていませんので、それ以後の原詩は編集者が補填しました。

劫餘詩存掃帚録

三浦勇次著

古人曰く「書は心画也」と、又曰く「文は人也」と。しかるに「心即ち人也」である。されば「画中詩有り、詩中画有り」との語も生ずる。私の受くる樗書からの感銘と樗詩からの感銘とは全く等しい。即ち「詩中書有り、書中詩有り」である。樗書された樗詩は、字字句句相乗積となって無限に感銘が拡大される。

何人といえども詩情はあるのであって、これを吟詠するとき客観のできる詩となる。吟詠の方法として俳句あり短歌あり漢詩あり……千姿万態ありといえども、樗詩の場合漢詩が最も私に共鳴を起す。共鳴は原音の幾万分の一に過ぎぬであろうが、私には獅子吼と感ずる。

漢詩には一定の形式があつて、なかならず、私の場合には平仄と韻の約束が第一の難所である。それが樗詩の場合は、激湍となり、飛泉となつて絶大の効果を發揮する。

このようなことを言うといかにも、樗詩を百％分解しているようだが是は形式論であつて、詩そのものについては、鏡花水月、解っているようで真如はとらえ難く、所詮、一盲の摸索のみである。尾端を撫して象とは掃帚の如しに過ぎまい。

劫餘詩存の縁起はその序文によつて知られる。これはまことに尊い。杜詩が詩史と云われているように、この縁起のゆえに編年体の劫餘詩存はそのまま文化復興史である。

劫餘、確固として此に、詩存す。

觀妙、談玄、又、藝論

一として眞に非ざる莫し應に敬昵すべし。

至人の吟詠は乾坤を裏(つ)む。

これは劫餘詩存を通読したときの私の感想であつた。

閑人の行迹豈に存するを須いんや。

戦後の昏迷筆を呵して論ず。

翹望す和平と文化とを。

詩篇留め得て乾坤に托す。

これは同韻によつての樗詩の回示である。転句に詠ぜられた如く、和平と文化との翹望によつて貫かれたのが劫餘詩存である。日夜朝暮に読誦して常に私は感銘を新たにす。これを書き留めて置いたならば、あるいは、これから漢詩に目を向けようとする人の参考の一助にもなるうかと思つた。しかし、それかといつて解釈文と誤解されては樗詩の迷惑となる。どこまでも一盲の撫象談である。掃帚録と題した所以。

乙酉五月念四罹戰災避難途上作

紅顏負笈出家郷。四十年華夢幾場。笑我本來無一物。却餘贏得鬢邊霜。

紅顏笈を負うて家郷を出づ。四十の年華夢幾場。笑う我本来無一物。劫余かち得たり鬢辺の霜。

紅顏に起こり白い霜に結ぶ対照の妙、この間四十年、夢幾場と含蓄に富む経過、我本来無一物と物質の假相を道破された。戦火によって、財物を失い、しかも本来無一物と諦観するのは力である。精神力である。鬢辺の霜は、この精神力の象徴と私は読んだ。

同

食無魚介住無家。暮雨蕭蕭小巷斜。沽醉我將消佛鬱。怕他酒陣作長蛇。

食に魚介なく住むに家なし。暮雨蕭々として小巷斜めなり。酔を沽うて我れ將に佛鬱を消せんとす。怕る他の酒陣長蛇を作すを。

食するに魚介なく住むに家なし、当時兆民の窮状がこの一句に活写されている。酒に欲望を滅した私は、「ぞうすい食堂」の前、長蛇の陣中の一人であったことを思い出して、ぞつとする。

得家信

戰災兩度及身邊。襪被三旬七處遷。兒女傷痍何日癒。家書頻促賦歸田。

戰災兩度身邊に及び。襪被三旬七處に遷る。兒女傷痍何れの日にか癒えん。家書頻りに促がす

歸田を賦せよと。

戰災に負傷された兒女(現谷村夫人)の看病に一身を捧げられた父性愛の尊さ、帰郷を促す家信を、じつと耐へて、防空頭巾を冠り、一ヶ月の間に七ヶ所も移られた窮状、看病にゆとりが生じる程に傷痍が軽快されたときは『漢詩を勉強しましたよ』と承ったことがある。

壕居

一望誰知是帝都。灰塵何處認康衢。秋空偶挂下弦月。描出寒林枯木圖。

²

一望誰か知る是れ帝都。灰塵いずれの処にか康衢を認めん。秋空たまたま下弦の月を掛けて。描き出す寒林枯木の凶。

全く、当時の帝都は武蔵野の昔に返ったことであつた。立木が炭化して地上に黒々と立っていたが、スゴかつた。描き出す寒林枯木の凶、ただでさえ弦月は不気味なものである。これらの枯木も、いつとはなしに、窮民の燃料として消えて行つたことである。

この作は壕舎の裏の野天風呂に浸つての作と承る。

颱風襲壕舎

烈風驅猛雨。日夜駭心魂。誰識壕居好。閒看屋漏痕。

烈風猛雨を駆つて。日夜心魂を駭かす。誰か識る壕居の好きを。間に見る屋漏痕。

焼残りや、強制疎開の木材によるひ弱い壕舎が台風に襲われたら、たまったものではない。その中にあつて雨漏りの痕に筆意を捉らえて楽しまれた筆聖、顔真卿もかくやと。

八月旬五拜 大詔

一閃恠光灰廣洲。無端大戦此收矛。吁嗟臣罪以何贖。遂誤邦家千載籌。

一閃の恠光広洲を灰にし、端無く大戦ここに矛を収む。ああ臣が罪何を以てか贖わん。遂に誤る邦家千載のはかりごと。

一閃の恠光と千載の籌、首尾対象の妙、なげかれつつも詩人の吟詠…。

漫吟

笑我孜孜耕硯田。災餘屢乏杖頭錢。朝來細寫晉賢帖。又爲傷兒烹白饘。

笑う我れ孜孜として硯田を耕す。災余しばしば乏し杖頭の錢。朝来細やかに写す晋賢の帖。又傷兒の爲めに白饘(かゆ)を煮る。

杖頭の錢とは元来お小遣いのことである、多くは酒代。併しここでは令嬢のお米代である。芋を食すると米を食するのでは、傷の癒りが目に見えて違ふのである。米を入手されるのにどれ程苦心されたことか。当時、米は持ち運びさえ禁じられていた。乏しい時はお粥に煮られたことであらう。このように大切なお米代を杖頭の錢と興ぜらるるまた詩人の心。

歸省

征人玉碎杳無還。路上胡兒行破顏。吾筆何堪蟹
行字。采薇欲老故鄉山。

征人玉碎杳として還るなし。路上の胡兒行く行く破顔。吾が筆何ぞ堪えん蟹行の字。采薇老いんと欲す故郷の山。

忠勇な兵は玉砕して遺骨さえ帰っては来ない。それなのに我が物顔に横行する洋鬼、横這いの字なんか見ても胸糞が悪い。ええ国に帰ってわらびでも采って……私もそう思ったことであつた。

拜石兄罹災後。在熊本。遙見寄書。時余亦罹災。在壕
舍。賦呈。

枯木殘灰繞敝廬。秋風兀坐得君書。墨林閒殺換
鷺手。焦土一隅栽豆諸。

枯木殘灰敝廬を繞る。秋風兀坐君が書を得たり。墨林閒殺す換鷺の手。焦土の一隅豆諸を栽す。了曰く君子もまた困ることがある。手に腹は代えられぬと。焼け土に豆や、諸を、植えられた。(生け垣も植木も屋根も南瓜葉に包まれたのが僕の家です)と当時私も知人に通知したことであつた。

失題

廟堂武弁誤經綸。上蔽皇明下賺民。九死得生羸
此辱。忍看鴻業盡灰塵。

廟堂の武弁經綸を誤る。上は皇明を蔽い下は民を賺す。九死に生を得て此辱を羸つ。忍び看る鴻業尽く灰塵。

廟堂の武弁とは、委任された国家の武力を横領した軍閥である。真の政治家を殺害して国家の目を潰し、国鈞を乱し、隣国を蹂躪して世界の憎しみを買ひ国を滅亡に導いた經緯を僅々二十八字で表現した詩史の一編。

乙酉秋晚。驥山老兄避戰禍在信州。寄書曰。頃者赴北
越。欲得魚而不得。却獲酒矣。時余亦罹災。歸臥海南。
偶舉網得魚。戲賦之。郵寄。

信北君藏三斗酒。海南我網細鱗鮮。多情最是天

邊月。千里清光照兩筵。

信北の君は蔵す三斗の酒。海南の我は網す細鱗の鮮。多情最も是れ天辺の月。千里清光兩筵を照らす。

飲むに酒なく、食うに魚介なき秋、三斗を得たる酒仙、細鱗を得たる騷客、平昔ならば早速に相引いて終宵痛飲したことであらうに今は山河千里を隔てて、かなたは酒あれども肴なきを嘆じ、こなたは肴あれども酒なし、この良夜を如何せんと嘆じたことであらう。只天辺の月のみは千里の清光を送って海南と信北との両つの筵を一時に照らす。その感懐やいかにと月に向うて見たいことであった。

途上邂逅舊友

相逢何久濶。鬢髮映霜林。俚語童時調。仍存竹馬心。

相逢う何ぞ久濶。鬢髮霜林に映ず。俚語童時の調あり。なお存す竹馬の心。

ものさびしい旅先でひよっこり逢った老友、お国なまりで話すうち、いつしか互に童顔に返っていた。

(皆さんも同窓会でそうでしょう。)

歸臥雜詩

客寓江都四十秋。歸來夢落古并州。風光有似年前否。綾瀨蒲帆墨水鷗。

客寓江都四十秋。歸來夢は落つ古并州。風光年前に似たる有りや否や。綾瀨の蒲帆、墨水の鷗。

ほんとの故郷に歸臥してみると、四十年も住んだ第二の故郷の東京が却ってほんとの故郷に思えて、綾瀨、墨田を夢に見ると懐かしむ詩人。唐の賈島もそうであった。

得意離家失意歸。江山斂迹欲忘機。弟兄一夜談何事。明日同登舊釣磯。

得意家を離れ失意にして歸る。江山迹を斂めて機を忘れんと欲す。弟兄一夜何事をか談る。明日同じく登る旧釣磯。

併し、一石、一木、昔ながらの故郷、「あすこは昔よく釣れたね」「兄さんあしたは、釣りに行こう」。

曲浦停舟問小童。童言客覓是家翁。平明蓑笠擔竿去。只在煙波縹渺中。

曲浦舟を停めて小童に問う。童は言う客の覓むるは是れ家翁。平明蓑笠、竿を担って去る。只在ら⁵ん煙波縹渺の中。

「おい坊や、○○さんという人を知らないかね」「それは家のおじいちゃんだよ、おじいちゃんは今朝早く釣りにいった。サア……どっちへ行つたかな」。

賈島の隠者を尋ねて遇はざるの詩とまた別の趣を見る。

漁郎在昔跨亀歸。今我無心坐釣磯。玉筥不開頭
已白。郷村半是主人非。

漁郎在昔亀に跨つて帰る。今我れ無心釣磯に坐す。玉筥開かず頭已に白く。郷村半ば是れ主人非なり。

四十年振りの故郷には、もう知つた人も少なく、玉手箱は開かないのに白髪になって帰つて来た、今浦島のさびしい心。ちなみにこの結句は白詩の商山路有感の結句を援用された由を承つた。

幾遇戰災霜髮新。半生勞作付灰塵。遣愁唯有一
枝筆。不歎江湖淪落人。

幾たびか戦災に遇つて霜髪新たなり。半生の労作灰塵に帰す。遣愁唯有一枝の筆。歎せず江湖淪落の人。

戦災の労苦も、労作の滅失の憂愁さえも、この一本の筆さえあれば消すことができるという筆聖の確信。先代梅若万三郎名人はこの扇一本あれば愁うことはないといつたとか、鶴澤清六は戦災のとき三味線の撥だけを持つて避難したとか。達人の愛用品には血が通つていると信ぜらるる。

興來驅筆倦圍棋。無復戰塵侵硯池。劫後文房餘
四寶。換鶯何必學羲之。

興来つて筆を駆り、倦めば棋を圍む。復た戦塵の硯池を侵す無し、劫後文房四宝を余す。換鶯何ぞ必ずしも羲之を学ばん。

この一連は終戦数ヶ月後の作、世情も大部平静を取り戻し、筆聖を筆聖として尊敬するようになり、文房用品入手の労苦が段々無くなつたことが察せらるる。

無復騷人驚寓居。有時風雨阻樵漁。閑裁退筆作
羅宇。縷縷紫煙成篆書。

復た騷人の寓居を驚かす無し。時有りて風雨樵漁を阻む。閑に退筆を裁して羅宇と作せば。縷縷紫煙篆書を成す。

晴耕雨読、古筆の軸で羅宇を作られたら輪に吹く煙が篆書に見えたという、書聖の閑日月、その頃煙草乏しく、キセルで細く長く吸い延ばされたこと。また詩史である。

⁶ 屋壁漏痕錐畫沙。臨池妙悟似禪家。森羅萬象皆

師友。閒詠風雲雪月花。

屋壁の漏痕、錐画沙。臨池妙悟禪家に似たり。森羅萬象皆師友。閒に詠ぜん風雲雪月花。
古人の書訣に「屋漏痕」だとか「錐画沙」だとかいうことがある。書道の悟りである。これらの言葉はまるで禅問答のようだが、思うにそればかりではあるまい。森羅萬象何一つとして師友ならざるはない。だから閑を見ては風、雲、雪、月、花、を詠じて道の養いとしたいもの。

丙戌新年口占

國破家亡春不春。泣寒泣餓劫餘民。能収亂局濟時者。一億萬中無一人。

国破れ家亡びて春も春ならず。寒に泣き餓に泣く劫余の民。能く乱局を収めて時を濟う者。一億萬中一人無きか。

耐乏生活は終戦後虚脱を来し、衣無く食無く窮乏の苦痛は更に長く続いた。何の正月ぞ真の政事家出て時局を救えの感は一億の民が皆済しく抱いた念願であった。苛斂誅求、供出、皆苦痛を忍んだ。幸にして、今日、池田大臣をして日本は世界の大国とまで言はしめるようになったのは、人間万事塞翁の馬か。

丙戌元旦所感 昭和二十一年

將傾大厦孰能支。深省唯須護國基。負荷人行殘雪路。迎春梅傲歲寒姿。

將に傾かんとす大厦たれか能く支えん。深省唯須らく国基を護るべし。負荷人は行く殘雪の路。迎春梅は傲る歲寒の姿。

国傾いては、強力といえども一人では、どうにもならん。一億の力で、幸に残った礎の上に建て直しをしようではないか。梅さえも寒を凌いで雄々しく咲いているではないか。

故園竹 次陸游晨起韻

庭前一叢竹。家翁曾所栽。年年凌霜雪。歲歲添孫來。劫餘吾歸臥。迎春舉壽杯。鼎坐弟與兄。話舊顏同開。先師此講學。少時從父陪。茫茫四十歲。歲與人不回。故園今就荒。隔竹島聲哀。涉世棹濁浪。不如留翦菜。

竹雨曰。因竹發興。寫到團欒之樂。末幅語入感慨。淒惻無限。

庭前一叢の竹。家翁曾て栽うる所。年々霜雪を凌ぎ。歳々孫を添えて来る。劫余吾れ帰臥し。春を迎えて寿杯を挙ぐ。鼎坐弟と兄と。旧を話して顔同じく開く。先師此に学を講じ。少時父に従つて陪す。茫々四十歳。歳人とともに回らず。故園今や荒に就き。竹を隔てて鳥声哀し。世を涉つて濁浪に掉ささんこと。留つて菜を翦るに如かず。

竹雨先生評して曰く「竹に因つて興を發し、写して團欒の楽しみに到る。末幅、語は感慨に入り淒惻限り無し」と。

雪晨奇景

古松偃蹇翠成層。一道寒泉遶石鐙。深夜天公飛玉屑。白描山下獨歸僧。

古松偃蹇翠層を成す。一道の寒泉石鐙を遶る。深夜天公玉屑を飛ばし。白描す山下独歸の僧。古松が横ざまに生えていて、その側の石段をめぐつて泉が流れている。夜に入つて雪が積つたため、それが帰山する一人の僧に見えたという幻想詩。

觀唐人眞蹟

羽衣舞罷失芳姿。曲遏行雲亦一時。唐代野僧曾弄筆。墨痕千載照書帷。

羽衣舞い罷んで芳姿を失し。曲行雲を遏むるも亦一時。唐代の野僧曾て筆を弄す。墨痕千載書帷を照らす。

どんな美しい舞姿でも、また行く雲を遏するという程の妙なる音楽でも、舞う間、歌う間のもので、やがてあとかたもなく消えてゆくのに、唐代の名さえさだかでない坊さんの筆蹟が千数百年後の今も猶墨痕あざやかに、書齋に仰がれている。諸君、夢にも筆をおろそかには運ぶまい。

淨瑠璃人形

土偶購來陳几前。一持院本一二絃。無聲却勝有聲曲。細説人情幽又玄。

土偶購い來つて几前に陳ず。一は院本を持し一は三絃。無声却つて勝る有声の曲。細やかに人情を説いて幽又玄。

延領欹身欲語遲。一聲裂帛撥絃時。無心土偶嬌

成態。多感人催雙涕洟。

頷(くび)を延べ身を歛(そばだ)てて語らんと欲する遅し。一声裂帛絃を撥う時。無心の土偶嬌として態を成し。多感の人は催す双涕洟。

四国は浄瑠璃の本場である。この人形は多分郷土芸術品であろう。多感の詩人は浄瑠璃の語り手であられる、恐らく腹話術に依って「……わしやなんぼうでもええきらぬ……」。この二首は白楽天の琵琶行につながるを持っていると思う。

郷家迎誕辰

故里偶迎生誕辰。且歡且戚憶雙親。我今五十又加四。已過家君齡一春。

故里(またまた)迎う生誕の辰。かつ歎びかつ戚(かなし)み双親を憶う。我れ今五十又四を加え。己に家君に過ぐ齡一春。

五十四回の誕生日に迎えられ、御先考より一才を越された詩人の述懐。

假寓奈良帶解寺

南去平城一里餘。千年古刹許僑居。茂林脩竹臨流處。暫避炎塵學坐漁。

南、平城を去る一里余。千年の古刹許に僑居す。茂林脩竹流に臨む處。暫らく炎塵を避けて坐漁を学ぶ。

浄域留蹤亦宿縁。漂流濁世絶葷羶。古都天地多靈感。洗硯欲參文字禪。

浄域蹤を留むるも亦宿縁。濁世を漂流して葷羶を絶つ。古都の天地靈感多し。硯を洗って参ぜんと欲す文字禪。

本尊おびとけ地藏は安産のお守を授くる所とか、清和天皇以来の由緒あるこの名刹に足跡を留めるのも何かの宿縁。物資不足のためとはいえ、葷酒やもろもろのなまぐさを絶つて来たためか。それはともかく古都の天地は三筆三跡にもゆかりの地、硯を洗って大に文字禪に参ぜられたことが想像される。知らず文字の安産を祈念されしや否や。

作書換宣紙

世情一擲付雲煙。澄慮欲參文字禪。只恨劫餘縑

素乏。塗鴉換得白鷺箋。

世情一擲雲煙に付す。澄慮参ぜんと欲す文字禪。只恨む劫余縑素の乏しきを。塗鴉換へ得たり白鷺箋。

南都は古来文房四宝に富むといわれているが、戦後はそうもいかなかったのであらうか。烏を白鷺に換えられたのは流石。

篠島紀游五首

喪亂多年未得閑。爲忘行樂在人間。問君拉我去
何處。滿棹清風碧一灣。

喪亂多年未だ閑を得ず。爲めに忘る行樂の人間に在りしを。問う君我を拉して何処にか去る。滿棹の清風碧一灣。

行樂が人間にあることを忘れられたも道理。当時お菓子さえも最早や生涯口にできまいと私などは思っていた。

篠島如螺海上浮。松沙映處伍閑鷗。浴潮時憩高
巖頂。斷續漁歌遠近舟。

篠島螺の如く海上に浮ぶ。松沙映ずる処閑鷗に伍す。潮に浴して時に憩う高巖の頂。断続の漁歌遠近の舟。

が、流石に詩人、鷗に伍し、漁歌を聞く、斯くてこの一聯の吟詠を生まれた。

朱欄構在翠微巔。山海珍羞上綺筵。憂患十年無
此樂。酒中憶殺李青蓮。

朱欄構えて在り翠微の巔。山海の珍羞綺筵に上る。憂患十年此の樂無し。酒中憶殺す李青蓮。李白は船上らなかつたが、この酒中仙は船から更に翠微の巔に上られた。李白一斗詩百篇というから詩の篇数から逆算して、五合の酒を召し上がったと解釈してもよからう。

賓主盡歡相與橫。忽疑半夜迅雷轟。起推窓戶天
無影。月照牀頭室有聲。

賓主、歡を尽くして相互(とも)に横わる。忽ち疑う半夜迅雷轟くかと、起(た)つて窓戸を推せば天に影無し、月は牀を照らして室に声有り。

皆さん解りますか。黄庭堅答へて曰く「爛醉臥に就く、鼻鼾雷の如し」と。

歸帆過處浪翻銀。雲樹烟邨入眼新。手剖章魚同
一盞。長風吹髮拂炎塵。

帰帆過ぐる処浪、銀を翻えす。雲樹煙邨、眼に入つて新。手に章魚を剖きて一盞同じゆうす。長風髪を吹いて炎塵を払う。

締めくくりとしての貫録を示す第五首、読み至つて思わず朗吟してしまふ。誰ですかタコで一パイやりたいなんて。

題墨竹

清節高風推此君。四時情趣自超群。尤欣白雨一
過後。燈下鉤簾看綠雲。

清節高風此の君を推す。四時情趣自ら超群。尤も欣ず白雨一過の後。灯下に簾を鉤して緑雲を看る。

この一首によつて、王徽之が竹を指して「何ぞ一日も此君無くして可ならん耶」といったゆえんがうなづけるであらう。芳翠画伯の墨竹は清節高風そのものである。

寄驥山老兄 後首次見寄韻

劫餘天地感懷多。借問信山秋奈何。休患南都衣
食乏。滿林錦繡滿田禾。

劫余の天地感懷多し。借問す信山秋いかん、患うるなかれ南都衣食の乏しきを。滿林の錦繡、滿田の禾。

何という豊麗な消息詩であろう。大和路の紅葉の錦に敝衣を忘れ、豊かな稲のみのりを見ては欠配遅配の憂さを晴らされた詩史。

捨姨二字韻何悲。緬想騷人對月時。長樂寺邊瓢
裏酒。和將雙淚濺苔碑。

姨を捨てるの二字、韻何ぞ悲しき。緬想す騷人月に対するの時。長樂寺辺、瓢裏の酒。双涙に和し將(も)つて苔碑に濺ぐ。

姨捨ての碑に涙と共に酒を手向けられた驥山先生、その夜から、夜なよな、鐘がゴンと鳴るや、老女の来訪を受けるようになったことであらうか。

拜歡 光明皇后御書樂毅論

不論筆蹟屬何人。墨妙傳來希世珍。千載勅封
今始關。宛然得見右軍眞。

筆蹟の何人に属するかを論ぜず、墨妙伝え來る希世の珍。千載の勅封今始めて關(ひらく)。宛然見るを時たり右軍の眞。

脱却範疇鋒更舒。署名何讓撫臨餘。入神筆正出
織手。俗眼誤爲髯叟書。

範疇を脱却して鋒更に舒ぶ。署名何ぞ撫臨の余に譲らん。入神の筆は正に織手に出ず。俗眼誤つて髯叟の書と爲す。

自注。御書樂毅論。筆勢極雄強。且以卷末署名與本文較異。或疑。其筆
致非女人筆。今拝歡眞跡。則知其爲妄說矣。

自注に曰く、御書樂毅論は筆勢極めて雄強、且つ卷末の署名、本文とやや異なるを以て或は疑う其筆致女人の筆に非ざるやを。今眞跡を拝観して、則ちその妄説たるを知る矣。

竹雨曰。論斷截然。一決衆疑。君深于書法。精于鑒識。人應首肯其言也。

竹雨先生評して曰く、論斷截然として衆疑を一決す。君、書法に深く、鑑識に精なり。人まさにその言を首肯すべしと。

丙戌秋晚自奈良至刈谷途上所見

黄波遠接碧雲連。秋滿蜻洲劫後天。徒手空拳案
山子。鳥聲喧裏立禾田。

黄波遠く碧雲に接して連る。秋は滿つ蜻洲劫後の天。徒手空拳の案山子。鳥声喧裏禾田に立つ。

徒手空拳の案山子こそ兵器も砲弾も奪われた、敗戦の日本の姿ではなかったか。それとも詩人のある時の自画像かも知れない。

丙戌歲晚

少歳塗鴉癖未除。字爲雲勢自嘘嘘。明朝五十更
加五。還染冰箋成墨豬。

少歳塗鴉癖未だ除かず。字は雲勢を爲して自ら嘘々。明朝五十更に五を加う。還た冰箋を染めて墨豬を成す。

また冰箋を染めて墨豬を成す。衛夫人筆陣図に「多肉微骨の者、之を墨豬と謂う」とあるからといって之を肉太にして骨なき文字と解してはならない、一夜明くれば亥の年である、墨書のいのしし。

丁亥新年 昭和二十二年

¹²南都淨刹養眞來。人竹平安斗柄回。雪案迎春春

獻瑞。兩三古帖一枝梅。

南都の淨利真を養いて来る。人竹平安斗柄回る。雪案春を迎えて春瑞を獻ず。兩三の古帖一枝の梅。

南都の淨利に於ける澄み切った書聖迎春の姿、竹、学びの机、古法帖、梅、世も平安である。

絶無空襲脅春正。鐵帽戎衣夢後情。羽子低飛追
翠袖。紙鳶高踏瞰蒼生。

絶えて空襲の春正をおびやかす無し。鉄帽戎衣夢後の情。羽子低飛翠袖を追い。紙鳶高踏蒼生を瞰(みおろ)す。

この、のどかな一首の中に、ついに見たことのない、国民服とはいえ鉄兜に洋服姿の当時の先生を想像し得る。また詩史の功德である。

偶成

何人眞箇是英雄。凡聖等歡雙眼中。絶代豪華恍
如夢。醒來天地一歸空。

何人か眞箇是れ英雄。凡聖等しく觀る双眼の中。絶代の豪華恍として夢の如し。醒め来つて天地一に空に帰す。

一億を叱咤した英雄も一朝にして絞首台の露と消えた。まことに絶代の豪華恍として夢の如しである。

偶吟示諸生

妙言佳句寫來時。手把牀頭筆一枝。忙裏偷閑閑
適意。學書何患步遲遲。

妙言佳句写し来るの時。手に把る牀頭の筆一枝。忙裏閑を偷(ぬす)んで閑、意に適す。学書何ぞ患えん歩の遅々たるを。

たえにしておもいにかなうことのははこころしづかにふでをとるべし

(妙にして思いに適う言の葉は心閑かに筆を把るべし。)

帶鮮寺窓竹

三尺玻璃十六方。當窓綠竹見殊光。四時無厭自
然畫。雨洗風篩還雪妝。

13 三尺の玻璃十六方。當窓の綠竹殊光を見る。四時厭く無し自然の画。雨洗風篩還た雪妝。

三尺の硝子戸十六枚、水晶の様に磨かれている、澄観さるる書聖。書聖が竹か、竹が書聖か。

謝榎陵君見贈手獲鮭

北奥銀鱗味勝鱸。惠然一夜落寒厨。山重水複君
家遠。醉舐吟毫興不孤。

北奥の銀鱗味鱸に勝る。惠然一夜寒厨に落つ。山重水複君家遠し。酔うて吟毫を舐(なめ)れば興孤ならず。

李白もこの鮭のためなちば剡中への道を北奥に向けたたであろう。榎陵先生獲物の意外に大きかったことに二度びつくり。

偶感

運腕差如意。臨池四十年。雲煙供養足。何日得
通仙。

運腕やゝ意の如し。臨池四十年。雲煙供養足りて。何れの日か仙に通ずるを得ん。

東壁列仙の班に招かれたのは、この十二年後(一九六〇)である。前後半世紀を超える雲煙供養、尊しとも尊し。

漂婦

寒流晨激雨耶非。少婦臨谿洗綵衣。戈熄三年夢
難結。空勞織手侍郎歸。

寒流あしたに激するは雨か非か。少婦谿に臨んで綵衣を洗う。戈熄んで三年夢結び難し。空しく織手を労して郎の帰るを待つ。

この詩題は、漂母によって着想された創造語の由であるが、いかにも古典的な感じである。内容と共に坐漁による獲物とも言えるこの一篇。遮莫この詩と、李白の子夜呉歌を並べて見て、千二百年の距りが感ぜられるであらうか。人間は、戦争という惨禍をどうして、こうも引つきりなしに繰り返えさねばならぬのだろうか。

時事漫吟

半時暗澹半時明。戰禍于今及短檠。懷騁當年空
襲下。壕中滅燭坐殘更。¹

半時は暗澹半時は明。戦禍今において短檠に及ぶ。懐いは聘す当年空襲下。壕中燭を滅して殊更に坐す。

停電に次ぐに停電、当時、電気、瓦斯による生活さえも最早、日本人には不能ではないかと、悲観していたことを思い起す。併し敗戦の故に、物質面に於ける復興は、目覚ましく、戦前を遙かに凌ぐ程の豊さになった。

休把巷談登舌端。劫餘世態使人寒。亂離今日傷心地。詩酒何時繼舊觀。

巷談を把つて舌端に登すなかれ。劫余の世態人をして寒からしむ。乱離今日心地を傷らば。詩酒何れの時にか旧觀を継がん。

精神面に於ては、後遺症の悪化甚だしく、今尚、言うに忍びず、聞くに耐へない出来事が日々相継いで起きている。

衣糧乘屋百無全。仍領吟花弄月權。憂國詞人風雅士。啓明文化著鞭先。

衣糧乗屋すべて全き無し。仍(な)お領す吟花弄月の權。憂国の詞人風雅の士。啓明文化鞭を著くる先んぜよ。

衣、食、住、車、一つとして満足でなかった当時、詩人は、そのままこれを詠いあげられて、この一聯の詩史となった。

探梅

一二又三五。行人印屐痕。回看山驛路。踏雪到梅邨。

一二又三五。行人履痕を印す。回看山驛の路、雪を踏んで梅邨に到る。
前首に所謂、吟花弄月の權の行使である。

讀詩窓十四年 次韻以道謝

劫火焚書所剩稀。一篇珠玉伴鄉歸。雨聰翦看無厭。携入春山忘采薇。

劫火書を焚いて剩(あま)す所稀なり。一篇の珠玉郷に伴うて帰る。雨聰燭を翦(き)つて看れども厭く無し。携えて春山に入って采薇を忘る。

劫火、書を焚いて剩す所稀であったので、古本屋さえ目につけば、眼の色を変えて漁書したものである。

漁書が遂に癖となり、古本屋巡礼をする内、樗盒、先生壮年の頃に書かれた青淵詩存、観月集、南汎集等に奇観することが出来た。詩人は一篇の珠玉を郷里に伴われ、雨天には燭前に厭くなく、晴天には山に入

つてわらびを採ることさえ忘れて耽読するとうたわれた。本の名は詩窓十四年、古本店で巡り会いたいののである。

帶解寺早春

春入僧房暖尚輕。南簷曝背對新晴。竹深黃鳥啼無影。露重紅椿落有聲。

春は僧房に入つて暖尚お輕し。南簷背を曝して新晴に對す。竹深くして黃鳥啼けども影無し。露重くして紅椿落ちて声あり。

燃料乏しく、太陽熱を利用して日なたぼっこをしたことは、多くの人が経験されたことであろう。詩人の曝背は常人と、同日に論じてはならない。次に来る転結の見事な對句に目を留められたい。

丁亥一月洗神君來過。即次其所携缶盧題畫詩韻。

煮茗留賓雪後天。寒窓綠竹拂雲烟。清談不及塵煩事。品畫評書日似年。

茗を煮て賓を留む雪後の天。寒窓の綠竹雲烟を払う。清談及ばず塵煩の事。画を品し書を評して日年に似たり。

賓客所携の缶盧題画の詩を次韻されたとあるが、賓主の茶飲み話の模様を通じて、世の静謐の様までがうかがわれ、次韻とは思えない。

缶盧……篆刻の名手であり、且つ書画三絶といわれる清の呉昌碩。

芳野懷古

劫後來尋芳野春。梵鐘聲裡踏香塵。山櫻旭日猶餘在。唯缺烏巾緋鎧人。

劫後來り尋ぬ芳野の春。梵鐘声裏香塵を踏む。山櫻旭日猶余して在り。唯欠く烏巾緋鎧の人。緋威の鎧をつけて太刀佩きて見ばやとぞ思ふ山櫻花……落合直文

洗神君新獲缶盧厓鞠圖

四壁寒香霜氣加。秋光一半屬君家。天來巧想入神筆。妙絕缶翁厓鞠花。

16 四壁寒香霜氣加わる。秋光一半君家に属す。天來の巧想入神の筆。妙絶缶翁厓鞠花。

缶翁奇筆繪幽香。詩畫與書俱老蒼。眼看壁頭厓
鞠色。薰風五月覺秋霜。

竹雨日。缶翁畫格。俊異奇逸。人難爭勝。此作善稱甚妙。無一字不精切。

缶翁の奇筆幽香を繪す。詩画書と俱に老蒼。眼のあたり見る壁頭厓鞠の色。薰風五月秋霜を覚ゆ。

印人として余りにも有名な呉昌碩の画は中年後に学び初められたとの由である。(呉昌碩印譜初集白紅社刊解説参照)呉讓之、趙之謙と共に詩书画三絶とうたわれて居るので、この厓鞠図をこの様に看ぜられたことがうなづける。厓鞠という字義が解り兼ねたので、お尋ねしたら「がけに咲いた菊でした。」と詩人は教えて下さった。大字典では「鞠、菊に通ず」とあり、字源では「鞠、かわらよもぎ」とある、かわらよもぎは菊科であっても花は目立たない。ここの鞠は或(あるい)は野菊のたぐいかも知れない。私は南国肥前の生れであるが、野菊の盛りには丘陵全体が黄金色に光り、香りに包まれてしまう程である。殊に厓にたれさがった野菊は想っただけで香って来る様で竹雨先生がこの詩を評して「…一字として精切ならざるなし」と言われた意が解る。

丁亥五月赴于仙臺本宮兩地講習會

多歲江湖作勝遊。災餘自擬一閑鷗。酒逋書債猶
難贖。載筆來過古奧州。

多歲江湖勝遊をなす。災余自ら擬す一閑鷗。酒逋書債猶贖い難く。筆を載せて来り過ぐ古奧州。蔚勃として復興した書道熱は遂に書聖の出馬を乞うまでに昂まって来た。作中ただ、転句の酒逋を飲み不足、書債を書く権利、と解したい。

酪泥雅筵席上率賦

三十年來把臂親。劫餘忽作異鄉人。尊前有淚君
休怪。千里相逢萬感臻。示芳哉子

この酪泥はメーデーまつり五月一日であるうし、酒仙の集まり故泥の如く酪はふとの兼ねあいであらう。尚泥はドロではなくて、デイというナマコに似た海の虫だと簡野道明先生は説いてある。

三十年來臂を把つて親しむ。劫余忽ち異郷の人となる。尊前涙有り君怪しむながら。千里棚逢いて万感いたる。

酒は涙か溜息か。

四皓下山來乘風。暫時遊息墨林中。欣君顔色猶

¹⁷依舊。白草原頭一點紅。呈佩玉女史

四皓山を下つて来て風に乗ず。暫時遊息す墨林の中。欣ず君が顔色猶旧に依るを。白草原頭一点の紅

比喩に依つて興を發する妙作。流石、竹堂、驥山とそして御自身の四老を商山の四皓にたとえ、白髮頭を白草原と仰せらるる。白草原は王昭君の青塚のあるところで、白い枯草原の中に、そこだけ一ヶ所、緑の草が生えているという。そこで佩玉女史を紅一点と仰せられた。

別腸宏豁似深淵。滿酌對君誰泰然。觀會休嘆觥
小。獻酬終夜不須眠。呈流石兄

別腸宏豁深淵に似たり。滿酌君に対して誰か泰然。歡会嘆ずるなかれ酒觥の小なるを。獻酬終夜眠るを須いず

滿酌君に対して誰か泰然の誰かは実は詩人その人であつたらう。飲み明かそうと結句されたのがその裏づけである。

幾度酒場經戰功。堂堂引滿八仙雄。想君筆陣應
逾健。萬丈遊絲収掌中。呈竹堂兄

幾度か酒場戦功を経て。堂堂滿を引く八仙の雄。想うに君が筆陣まさに逾よ健やかなるべし。萬丈の遊絲掌中に収む。

八仙の雄とは詩人昭和八年作函山八仙歌中の雄と解した。また萬丈の遊絲とは仮名文字を指すのであるうか。

酌酒蘭亭祀普賢。驥翁何讓飲中仙。高談如舊不
知老。下筆龍蛇驚四筵。呈驥山兄

酒を蘭亭に酌して普賢を祀(まつ)る。驥翁何ぞ飲中の仙に讓らん。高談旧の如く老を知らず。筆を下せば竜蛇四筵を驚かす。

驥山先生を飲中八仙、就中、張旭に比して興ぜられたもので驥翁の面目躍如。

書海再刊一周年

書海重航已一年。群鶩轉項舊因縁。墨花繚亂魁
文化。遮莫狂瀾尚拍天。

書海重航已に一年。群鶩項を転ず旧因縁。墨花繚亂として文化に魁けず。さもあらばあれ狂瀾尚天を拍つは。

戦後、再刊して僅々一年、已にこの盛況、天を拍つ狂瀾を打ち越え打ち越え十三年にして財団法人を成すに到つた。

志筑中島氏見贈手製銘茶賦此道謝

古鼎松風手自前煎。筑山新茗洛陽泉。僧房清寂
無人到。投筆時參桑苧禪。

古鼎松風手自ら煎ず。筑山の新茗洛陽の泉。僧房清寂人の到る無し。筆を投じて時に参ず桑苧禪。

澄みきつたたずまいをテレビジョンでのぞくような一首である。茶というものは、どうして斯くまでに人の心を鎮めるのであらうか。先代萩の『かたへに飾る黒棚より、取り出す錦の袋物、風炉に架けたる茶飯釜の、湯の試みを千松に、飲ます茶碗も楽ならで、お末が業を信楽や、いつ水注しを炊ぎ桶、流す涙の水こぼし、心も滴き洗い米、釜に移して風炉の炭、直してあおぐ扇さえ……。

この上なくしんみり聴かれるのも、叙述に、所作に、遺つた茶道具の功德であらう。松風の音を起す古い風炉釜に、京の水を煮て、筑波山の新茶をいれ、人無き方丈に、しばし筆を忘れた筆聖の寂然たる姿。桑苧禪：茶経三巻を撰して有名な唐の陸羽が桑苧翁と号するので、時々桑苧翁の禪に参ずるとしやれたものであらう。

篆刻

幽齋揮鐵筆。朱白奪天工。大海掣鯨手。役來方寸中。

幽齋鐵筆を揮う。朱白天工を奪う。大海鯨を掣するの手。役し来る方寸の中。

篆刻彫虫の技といえば小細工を悔るかの如くであるが、一寸四方の中の小字と雖も天を衝き地を貫く勢が有るならば三丈の壁に書かれた大文字と異なることはない。その様な本当の篆刻を詠まれたこの作、兎角小刀の先でデッチアゲて奇を衒う向きのお護符(ふだ)にこの詩を写してさし上げたい。

南都寓目

鋤犁侵淨域。滿地只諸禾。鐘廢樓空在。南瓜繚似蘿。

鋤犁淨域を侵す。滿地只諸禾。鐘廢して樓空しく在り。南瓜繚うて蘿に似たり。

終戦二年、糧食愈々乏しく、人民は殆んど俄百姓になった。自裁自食。供出に因る鐘の無い鐘樓に南瓜が這いかぶさった寺院の多い古都の情景、悽蒼である。

訪竹堂于富士山麓而不遇

雲低岳麓柳毵毵。燕子飛過何氏庵。村驛蕭條君
不見。一簑烟雨向湘南。¹⁹

雲は岳麓に低れて柳毳々(さんさん)。燕子飛んで過ぐ何氏の庵。村駅蕭条として君見えず。一
簑の烟雨湘南に向う。

不自由な乗物も親友に遇う楽しみの前には苦にならなかつたが、遇はずに帰れば又千里、一簑の烟雨湘
南に向う。鄭谷の、「君は瀟湘に向い我は秦に向う。」とは亦別種のペース。

丁亥八月邂逅如流書伯于松里山人邸

臨騎曾共品鶯群。劫後瓢零一片雲。偶爾流過衣

浦畔。墨華薰處忽看君。

臨池會て共に鶯群を品す。劫後瓢零一片の雲。偶爾流れ過ぐ衣浦の畔。墨華薰ずる処忽ち君を
看る。

前詩と打って変わつて、是は又偶然邂逅のうれしき、あれは駿州岳麓、これは尾州衣が浦雲水の流るる
が如き行脚、結句まことに適切如流先生名は郁。

偶作

食無魚介出無車。彈鋏高歌又歎嗟。履正則窮
歪則達。何慙劫後未成家。

食に魚介無く出づるに筆無し。鋏を弾いて高歌又歎嗟。正を履めば則ち窮し歪なれば達す。何
ぞ懸じん劫後未だ家を成さざるを。

この機会に故事を学ぼう。史記孟嘗君伝に「馮驩、孟嘗君の客(食客)を好むと聞きて之に見ゆ。孟嘗君
を伝舎に置く。驩その劍(鋏)を弾じて歌いて曰く。長鋏帰来乎、食に魚無しと。孟嘗君之を幸舎に遷す。
食に魚あり。復た劍を弾じて歌いて曰く、長鋏帰来乎、出るに輿無しと。孟嘗君之を代舎に遷す。出入に
輿車あり。又劍を弾じて歌いて曰く、長鋏帰来乎。以て家を為す無しと。云云」

この故事を知つてこの作を鑑賞すると興趣格別と信ずる。字引では彈鋏Ⅱ「主人を諷して禄位を求む」
とある。詳しく知ろうとする人は中国故事物語(河出書房新社刊)の「長鋏帰来(かえらんか)」の項を見ら
るとよい。

鷺

白鷺爲群何處歸。一行遠映碧天飛。山中自有水
明地。莫向泥沙汚雪衣。

竹雨曰 寄興深微。不墮詠物熟路。

白鷺群を爲して何れの処にか帰る。一行遠く碧天に映じて飛ぶ。山中自ら水明の地有らん。泥
砂20に向つて雪衣を汚すなかれ。

おおい、前衛に行くくんじやないぞ。正道につけ、正道に三この解釈如何。

戲言博粲

作詩不若耨田疇。文筆難爲升斗謀。歸去故山無
尺地。自嗤家法倣南州。

詩を作るは田疇に耨(くさぎ)るに若(し)かず。文筆為し難し升斗の謀。故山に帰り去つて尺地無し。自ら嗤(わら)う家法南洲に倣(なら)いしを。

詩を作るより田を作れと言いならわされている通り、その頃文筆では生計がたたなかつたので、故山に帰つたが、作ろうにも田畑がない。それは家憲として西郷さんの遺法を用いたからだ、との詩人のざれごと。南洲翁の詩に「幾たびか辛酸を歴て志始めて堅し。丈夫玉碎軛全を恥づ。我家の遺法人知るや否や。児孫の爲めに美田を買はず」とある。

詠史

趙高捕鹿獻君王。呼馬呼麋亦未妨。只恐人間心
類獸。大秦丞相是豺狼。

趙高、鹿を捕へて君主に獻ず。馬と呼び麋と呼ぶも亦未だ妨げず。只恐る人間の心獸に類するを。大秦の丞相は是れ豺狼。

秦の天下を横領しようとした、秦の丞相趙高は、鹿を馬と言ひ張つて君王に獻じた。その言に従つた臣下を味方につけ、反対した者を殺して謀反を遂げた。ここまでが故事で、詩人はこう仰しやる。鹿を指して馬といったってそれは大したことではない。只恐れるのは人間の心が獸に類することだ。趙高は人間面をしていても山犬や狼と同じではないかと。麋は鹿の一種、鹿は仄字で平仄が合わぬために平字の麋が用いられた。

尚、謀られた君王胡亥は馬も鹿もけじめのつかない暗愚故、馬鹿(ばろく)といわれた。これがバカの初まりという説がある。

帶解寺偶吟

地偏無俗累。境靜有泉聲。竹影描窓搖。香煙題
壁縈。

地偏にして俗累なく。境靜かにして泉声あり。竹影窓に描いて揺(ゆ)れ。香煙壁に題して縈(めぐ)る。』

おびとけ寺の素描、全対格を以て画然。偶吟……偶吟に同じ。

題畫

孤松幽澗底。老幹拂雲端。半夜濤聲起。曉天嵐氣寒。

孤松幽澗の底。老幹雲端を払う。半夜濤声起り。曉天風氣寒し。(寒韻 端、寒)
是を私は次の通り読んで全対格と見たい。

孤松、澗底に、幽(しずか)に、

老幹、雲端を、払う。

半夜、濤声起り、

曉天、嵐氣寒し。

濤声……この場合松籟の事で波音ではない。

丁亥九月關東大洪水

刀江氾濫決階隄流。濁浪將吞關八州。昨苦旱乾
今惱水。敗殘家國那多憂。

刀江氾濫、隄を決して流る。濁浪將に吞まんとす關八州。昨旱乾に苦しみ今水に悩む。敗殘の家國那ぞ憂多き。(尤嗣、流、州、憂)

刀江、即ち利根川の洪水を嘆かれた詩史、当時の国情は真に慘憺たるものであった。

濫伐山林不省災。一朝騎虎勢難回。如今旱潦禍
相接。似警人間猪口才。

山林を濫伐して災を省みず。一朝騎虎勢い回し難し。如今旱潦、禍相接す。警むるに似たり人間猪口の才。(灰韻、災、回、才)

山栄えれば国栄え、山衰ゆれば国衰ゆるとは古来の言い伝えである。又江を治むる者は国を治むとも言はれる。猪口才の濫伐、仁者をして山を哀しませ、旱潦相次で禍を招き知者をして水を哀しませたのであった。

臨池雜興

書法千年何所宗。興來揮灑豁心胸。吳牋歎雪寒
光淨。徽墨飄香瑞色濃。筆底風生蹲猛虎。硯池
雲起躍潛龍。塗鴉畢竟吾娛我。未必追隨先哲蹤。

竹雨日 中幅二聯。詠出紙墨筆硯。首尾語意相應。別有會心。可謂完整之作。

書法千年何の宗とする所ぞ。興来つて揮灑すれば心胸豁し。吳牋雪を欺いて寒光淨く。徽墨香を飄して瑞色濃やかなり。筆底風生じて猛虎蹲まり。硯池雲起つて潜竜躍る。塗鴉畢竟吾れ我を娛しむ。未だ必ずしも先哲の蹤に追隨せず。(冬韻)

宗 〓 ほんもと

吳牋 〓 吳、即ち中国江蘇省産の紙

徽墨 〓 中国徽州府産の墨。

塗鴉 〓 くるく塗る、即ち文字を書くこと

蹤 〓 あしあと

七言律詩を学ぶためその平仄をしらべて見よう。(○平字、●灰字、△韻字)

書法千年何所宗。興来揮灑豁心胸。↓起聯

吳牋歎雪寒光淨。徽墨飄香瑞色濃。↓頷聯

筆底風生蹲猛虎。硯池雲起躍潜龍。↓頸聯

塗鴉畢竟吾娛我。未必追隨先哲蹤。↓尾聯

〔平仄の約束〕第一句の第二字が仄字であるときはその平仄式を仄起式という。この詩は仄起式である。第二字が仄ならば第四字は平でなければならない。これを二四不同という。第二字が仄ならば第六字も仄でなければならない。これを二六対という。

第一句の第二字が仄ならば第二句の第二字は平でなければならない。そして二四不同二六封の規定によつて第二句の第四字は仄、第六字は平でなければならない。

第三句の平仄は第二句と同じく、第四句の平仄は第一句と同じになる。これは丁度、第二句と第三句との間に折目のある屏風のようなもので、平仄については左右対照となる。第四句と第五句との間にも、第六句と第七句との間にもおのおの折目があつて、右と同じことを繰返えす。

〔韻の約束〕第一・二・四・六・八の各句は韻をふまねばならない。この詩の場合は上平声冬韻である。但し第一句は例外として韻をふまぬ詩もある。平韻の場合第三・五・七の各句の第七字は仄字としなければならない。この点は平仄の約束中、左右対照を破ることになる。

〔対句の約束〕二句づつを一聯として、起・頷・頸・尾の四聯となる。この内頷聯と頸聯とは、必ず厳密な対句をなさねばならない。この詩の対句は、吳牋と徽墨の物質、欺雪と飄香の天然現象、寒光と瑞色の天然現象、淨と濃の感覚。また筆底と硯池の位置、風生と雲起の作用、蹲と躍の動作、猛虎と潜竜の動物。と句々字々類概念が相對してみごとである。

起聯と尾聯は、意味を以て相對している。されば土屋竹雨先生も評して曰く「中幅の二聯は、紙墨筆硯を詠出し、首尾(起尾兩聯)は語意相応ず。完整の作と謂う可し」と。

この詩を自書、使用中の扇子を某大家が手に取つて見られ、末句「未必追隨先哲蹤」に至つて、大した見識ですなと感嘆せられた由さもそうず、さもありません。

尚、序でながら、絶句というのは律詩が半分に絶たれた形の詩で、例えばこの詩の初めの四句を採ると、仄起式後対格の七言絶句を成し、後半の四句を採ると仄起式前対格の七言絶句、また三・四・五・六の四

句を採ると、これは平起式全対格の七言絶句を成すのである。尚又、よく整った律詩になると、一・二・七・八の四句を採っても一首の七言絶句として見られる場合もあるのである。

釣蟹

丁亥十月初五與澄心會同人釣蟹於衣浦此日收穫甚少矣

東海書人偶擲毫。扁舟載酒釣沙螯。無腸公子斂
戈北。不似橫行波底豪。

丁亥十月初五澄心會同人とともに蟹を衣浦に釣る。此の日收穫甚だ小なり。

東海の書人偶ま毫を擲うち。扁舟酒を載せて沙螯を釣る。無腸の公子戈を斂めて北ぐ。似ず横
行波底の豪。(豪韻、毫、蟹、豪)

沙螯Ⅱカニのこと。無腸の公子もカニの異名である。

北Ⅱ敗北の北で、逃げること。

戈をおさめて逃げるとは、常に波底を横行する豪のものにも似合わしからぬとの御託宣であるが、この
一戦果して勝ち戦であったか、それとも負け惜しみか。副題には、この日收穫甚だ少しとある。

訪栗野君於銀街

訪到繁華熱鬧街。掩窓忽是一閑齋。孤燈對酌肝
相照。吐盡胸中萬斛懷。

訪て到る繁華熱鬧の街。窓を掩べば忽ち是れ一閑齋。孤灯対酌、肝相照らす。吐き尽くす胸中
万斛の懷。(佳韻、衛、齋、懷)

熱鬧Ⅱ混雑すること、さわがしきこと。

戦災後別れ別れになっていたが、たまたま上京、久し振りに銀座に栗野氏をたづねられた時の作。栗野
氏も非常に喜んで店を早仕舞して板戸を下ろし、街の雑踏を遮断して、一灯の下に対坐、酒を酌み交しな
がら肝膽相照らして積る懷いを吐きつくされた。録音がないので話の内容は知る由もないが、師弟の情の
こまやかさが、しみじみと美しく感ぜられる作である。

題自畫竹

或爲扶老杖。又作釣魚竿。競向人間去。孤高節
獨安。

或は老を扶くるの杖となり。又釣魚の竿となり。競いて人間に向って去る。孤高、節ひとり安
し。(寒韻、竿、安)

24 詩人は水墨画の名手。殊に、琅玕無限の色彩を黑白によつての表現甚妙。に拘わらず、曾て誌上に発表
されたことを知らない。孤高節独り安んぜらるるなるべし。

秋晚囑目

黄波萬頃刈禾闌。人散西疇暮靄殘。利刃一鎌誰
放却。初三織月挂林端。

黄波高頃刈禾闌なり。人散じて西疇暮靄残す。利刃一鎌誰か放却す。初三の織月林端に挂く
(寒韻、闌、残、端)

この様な發送は、とかく日本人好み、いわゆる和臭として難じられそうな情景である。併しこの考えが
和、唐共通であることは、韓愈の詩に「晴雲如擘絮、新月似磨鎌」と有ることによつても知られる。

戊子一月念九第五十六誕辰偶聞外孫出生記喜 昭和二十
三年

七八誕辰寧樂迎。飛書朝報外孫生。誰將趙璧比
兒子。不換大秦三五城。

七八の誕辰寧樂に迎う。飛書あしたに報ず外孫の生るるを。誰か趙璧を以て兒子に比す。換え
ず大秦の三五城。(庚韻、迎、生、城)
しろがねもくがねもたまもなにせむにまされるたからこにしかめやも 山上憶良

偶成

暴虎憑河客氣灰。壯心依舊尚崔嵬。平生涉獵千
年史。靜閱古今成敗來。

暴虎憑河客氣霜灰す。壯心旧に依つて尚崔嵬。平生涉獵す千年の史。靜かに古今の成敗を閱
して来る。(灰韻、灰、嵬、來)
こうして清澄高雅な書格がひらかれ、円熟沈潜した筆致が示現されて来たと思ふ。

訪舊友砂洲君子立田村四首
雲樹煙邨野水涯。墨香飄處是君家。因懷夏曉風
生座。十里平田盡藕花。

雲樹煙邨野水の涯。墨香飄る處是れ君家。因つて懷う夏曉風座に生ずるを。十里平田尽く藕
花。(麻織、涯、家、花)

驅使龍蛇競筆端。墨池硯海幾波瀾。卅年一過餘
豪在。舊誌與君燈下看。

竜蛇を駆使して筆端に競わしむ。墨池硯海幾波瀾。卅年一過余豪在り。旧誌君と灯下に看る。
(寒韻、端、瀾、看)

岐蘇分水野田間。夕照映波柔櫓閑。曾訪蘭亭儼
舟去。篷窓復看畫眉山。

岐蘇水を分つ野田の間、夕照波に映じて柔櫓閑なり。曾て蘭亭を訪れ舟を儼いて去る。篷窓
復た見る画眉の山。(刪韻、間、閑、山)

相逢悵酌別離卮。得意人間之能幾時。千里江山
路長在。加餐歲歲報花期。

相逢うて悵として酌む別離の卮。得意人間能く幾時ぞ。千里江山、路長へに在り。加餐歲々
花期を報ぜよ。(支韻、卮、時、期)

竹雨曰 清空如話。筆端不窘。而有許多風味。非老手不能。

第一首で旧友の居所の情景を、第二首では昔語りを、第三首では近郊探勝、第四首では別れの盃。瞭然
眼に看る如く、時の経過と共に哀愁を感覚される。されば、竹雨先生も評して「清空話するが如く筆端窘
らず。而も許多の風味有り、老手に非されば能わず」と。

尚、昭和三十五年詩人の日展作品であった高啓の「渡水復渡水。看花還看花。春風江上路。不覺到君家」
中の「春」を「薰」に置き替えると、第一首の情景になるであろう。

將去南都而移居於東都

閑寺隨緣暫避喧。復移萍迹向萍迹。南簷杏樹北
窓竹。歲歲無渝添子孫。

閑寺縁に随つて暫く喧を避く。復た萍迹を移して萍迹に向う。南簷の杏樹北窓の竹。歲々渝
無く子孫を添えよ。(元韻、喧、煩、孫)

假寓とはいえ足かけ三年、惜別対照のシンボルとして杏と竹と。読者をしてホロリとさせる。連想され
るのは、白楽天の「別種東坡花樹」曰く「花林好住して顛顛することなかれ春至らばた但知る旧に依りて
春なるを」と、これは少し消極的である。吾が詩人は「杏よ子、(み)を実らせよ、竹よ孫(たけのこ)をふ
やせよ。」と積極的である。